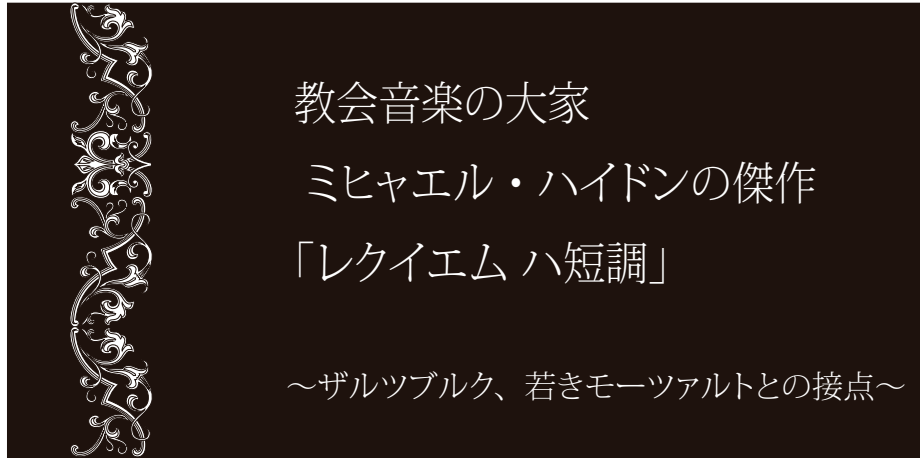


Kobe City Chamber Orchestra Kobe City Philharmonic Chorus

神戸市室内合奏団 神戸市混声合唱団 定期演奏会

神戸市演奏協会 第392・393回公演

先達から受け継ぐもの、新生するもの
～学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡～



2014年3月19日（水）19：00 開演
神戸文化ホール 中ホール

2014年3月22日（土）14：00 開演
紀尾井ホール



主催：（公財）神戸市演奏協会・神戸市・（公財）神戸市民文化振興財団 神戸文化ホール
東京公演マネジメント／KAJIMOTO

<プログラム>

ミハエル・ハイドン：交響曲 第25番 ト長調 P.16

Michael Haydn : Symphonie Nr. 25 G-Dur, P.16

- | | |
|----------------------------|----------------|
| I. Allegro con spirito | アレグロ・コン・スピリト |
| II. Andante sostenuto | アンダンテ・ソステヌート |
| III. FINALE: Allegro molto | フィナーレ:アレグロ・モルト |

W.A.モーツァルト：セレナーデ 第6番 ニ長調「セレナータ・ノットウルナ」K.239

Wolfgang Amadeus Mozart : Serenata Nr.6 D-Dur, "Serenata Notturna" K.239

- | | |
|---|------------------------|
| I. MARCIA:Maestoso | 行進曲:マエストーソ |
| II. Menuetto | メヌエット |
| III. RONDEAU: Allegretto—Adagio—Allegro | ロンデー:アレグレット—アダージョ—アレグロ |

- | | | | |
|---------|--------|---------|--------|
| ヴァイオリンⅠ | 白井 圭 | ヴァイオリンⅡ | 西尾 恵子 |
| ヴィオラ | 亀井 宏子 | コントラバス | 長谷川 順子 |
| ティンパニ | 安江 佐和子 | | |

<休 憩>

ミハエル・ハイドン：レクイエム ハ短調 MH155 (大司教ジーギスメントのための追悼ミサ曲)

Michael Haydn : Requiem c-moll MH 155 "Missa pro defuncto Archiepiscopo Sigismundo"

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| I .Introitus et Kyrie | イントロイトゥス・エト・キリエ |
| 1. Requiem aeternam | レクイエム・エテルナム—キリエ |
| II .Sequentia | 続唱(セクエンティア) |
| 2. Dies irae | 怒りの日よ |
| III.Offertorium | 奉献唱(オッフエルトリウム) |
| 3. Domine Jesu Christe | 主イエス・キリスト |
| Quam olim Abrahae | その昔アブラハムと |
| 4. Versus : Hostias | 我らが捧げまつる |
| IV. Sanctus | サンクトゥス |
| 5. Sanctus | サンクトゥス |
| V. Benedictus | ベネディクトゥス |
| 6. Benedictus | ベネディクトゥス |
| VI. Agnus Dei et Communio | アニュス・デイ・エト・コムニオ |
| 7. Agnus Dei | アニュス・デイ |
| 8. Cum sanctis tuis | あなたの聖人たちと共に |
| 9. Requiem aeternam | レクイエム・エテルナム |

- | | | | |
|------|-------|-----|-------|
| ソプラノ | 金岡 伶奈 | アルト | 八木 寿子 |
| テノール | 馬場 清孝 | バス | 西尾 岳史 |

プログラム・ノート

中村 孝義（大阪音楽大学教授・音楽学）

神戸市室内合奏団の2013年度最後の定期演奏会は、本年度の「先達から受け継ぐもの、新生するもの〜学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡」という年間テーマを、絵に描いたように見事でユニークなものとなった。扱われるのは、あのヨーゼフ・ハイドンの弟ミヒヤエルとモーツァルトの作品だ。兄ヨーゼフの存在が余りに大きかったため、彼が生きていた時代においても、またその後の時代においても、その作曲家としての価値や作品の価値が必ずしも正当に評価されてきたとはいえないのがミヒヤエル・ハイドンだ。

しかし、その音楽家としての生涯をザルツブルクで全うし、特に宗教音楽の分野でおびただしい作品を残した彼の実力は、同じザルツブルクで生を受け、その前半生をそこで過ごしたモーツァルトには深く認識されていたようだ。我々はモーツァルトの余りに豊かな天与の才のため、とかく彼が普通の社会や歴史とは異次元の世界から生まれてきた孤高の存在のように思うことが間々あるが、こうした考えは正しくはない。たとえ彼のように才能に恵まれていようと、無から有は生じない。もちろん彼も彼の先達や同時代の仲間から様々な影響を受けながらその音楽を作り上げてきたのだ。彼は非常に吸収力の強い人間だっただけに、影響を受けた作曲家は枚挙に暇がないが、もっとも近い存在として影響を受けたのが、ほかならぬミヒヤエル・ハイドンだったのだ。今日のプログラムは、まさにそのことを実際の音で示してみようという興味深い試みである。それでは早速今日演奏される作品を見ながら、そのことを明らかにしていこう。

ミヒヤエル・ハイドン：交響曲 第25番 ト長調 P.16

Michael Haydn : Symphonie Nr. 25 G-Dur, P.16

ミヒヤエル・ハイドン

兄ヨーゼフの陰に隠れて、その作曲家としての業績にあまり光があたってこなかったミヒヤエル・ハイドンだが、近年、音楽学的研究の進展や知られざる作品の録音が活発になるにつれ、その実態がより明らかになりつつある。兄ヨーゼフと同じようにウィーンの聖シュテファン大聖堂の少年聖歌隊員として活動した後、紆余曲折を経て1763年にモーツァルトの父レオポルトがザルツブルクの宮廷副楽長に昇進したとき、彼の後を襲って宮廷楽団のコンサートマスターに就任した。こうした事情でモーツァルト家とも縁が深く、何くれとなく親密な交流があったようだ。その後三位一体教会のオルガニストに任命され、モーツァルトが1781年にウィーンに出た後は、彼の占めていた大聖堂のオルガニストも兼任することになった。1801年、フランス軍のザルツブルク占領から逃れるため兄が楽長を務めていたアイゼンシュタットを訪れた際には、ニコラウス・エステルハージー2世侯から同楽団の副楽長の地位の提供を受けているが、辞退しザルツブルクに戻っている。だから結局彼は、40年余りをザルツブルクの一地方音楽家として過ごしたわけで、それが後世、兄ほどの名声を得ることができなかった一つの理由だろう。ただ当時でも、とりわけその宗教音楽に関しては高い評価を獲得していたことが知られている。

世俗音楽も多作で、交響曲も兄ほどではないにしても40曲以上を残している。今日演奏されるのは、彼が1783年に作曲した交響曲第25番 ト長調である。今日この作品が取り上げられるのは、この作品がモーツァルトと深い関わりを持つからである。実はこの作品、長い間、モーツァルトの交響曲第37番として知られてきたのである。ところが1907年に、ミヒヤエル・ハイドンの研究者として有名なパーガーが、アダージョ・マエストーソの序奏部分を除いて、他は全てミヒヤエルの作曲であることを明らかにしたのであった。

ウィーンに出た後、売れっ子の作曲家として忙しかったモーツァルトが、1784年頃、自身の交響曲作曲が間に合わないのを補うため、序奏だけ書いて使ったのではないかというのが、現在考えられている説である。冷静に耳を澄ませば、前後におかれた第36番《リンツ》や第38番《プラハ》とは音楽的に差があるし、現在ならまさに盗用として断罪されかねないことだが、それが長い間まかり通っていたのだから驚き以外の何ものでもない。ちょっと聴けばモーツァルトの作品と見紛うほど書法的に近いところもなくはなかったからだが、この事実は、この音楽がモーツァルトにとっても評価できる作品であったと同時に、それほど両者の音楽が近い関係にあったということの証左でもある。

曲は、アレグロ・コン・スピリトの第1楽章、アンダンテ・ソステヌートの第2楽章、アレグロ・モルトの第3楽章フィナーレの3つの楽章からなる。

W.A.モーツァルト：セレナード 第6番 二長調 K.239 「セレナータ・ノットウルナ」

Wolfgang Amadeus Mozart : Serenata Nr.6 D-Dur, “Serenata Notturna” K.239

ミヒヤエル・ハイドン

ミヒヤエル・ハイドンは、大司教からの求めに応じて、宮廷での演奏に供するため非常に多くのディヴェルティメントやセレナードといった管弦楽曲も書いているが、当然同じザルツブルクで宮廷音楽家として活躍したモーツァルトも、ミヒヤエルの作品を耳にしていたと考えられるし、また同種の作品を多数残している。交響曲が、基本的には4楽章構成の整った構成を持ち、各楽章で用いられる形式にも一定の約束事があった(もちろん例外はあるが)のに対して、セレナードなどは楽章数に関しても、また各楽章に用いられる形式や楽器編成も、ある程度の決まりはあったにしても、より自由で、たいていの場合には何か特定の慶事などの機会のためにただ一回演奏するために作曲された。もちろんこうしたいわば使い捨ての機会音楽だからといって、モーツァルトの場合決して手を抜いて作曲しているわけではなく、むしろそのファンタジーをより自由に羽ばたかせている感があり見逃せないジャンルとなっている。

今日演奏される《セレナータ・ノットウルナ》は、そうしたセレナードの中でもいささか変り種と呼んでもいいかもしれない。というのは、珍しく3つの楽章(普通はメヌエットを二つ含む6楽章くらしい構成が多い)しか持たず、しかも楽器編成も弦楽器にティンパニが加わるだけだからである。作曲の時期が1776年1月という冬であることから、野外用の音楽ではなく室内で演奏されるために作曲されたと考えられているが、どのような機会のために作曲されたかは、現在のところ明らかにはなっていない。アンサンブル全体は2群に分かれ、ソロとデュッティ(合奏)が交替するバロックの合奏協奏曲(コンチェルト・グロッソ)のスタイルを取り入れ面白い効果を出したり、第1楽章などでは、ソナタ形式に行進曲の要素を巧みに組み込んで楽曲内容そのものの充実を図ったりしている。いずれにせよ、音楽はモーツァルトならではの創意にあふれ、20歳に達したモーツァルトの成熟ぶりが随所にうかがわれる傑作となっている。

ミヒヤエル・ハイドン：レクイエム ハ短調 MH155（大司教ジーギスメントのための追悼ミサ曲）

Michael Haydn : Requiem c-moll MH 155 “Missa pro defuncto Archiepiscopo Sigismundo”

ミヒヤエル・ハイドン

先述したように、ミヒヤエル・ハイドンは例えば、かのE.T.Aホフマンがミヒヤエルの死の数年後に「ヨハン・ミヒヤエル・ハイドンが、宗教音楽の作曲家として時代と国を超えて最高の芸術家に位置付けられることは、現在では音楽を解するものであればだれしも認めるところである」「宗教音楽に対する厳粛な姿勢という点ではしばしば兄をはるかにしのいでいる」と指摘しているように、宗教音楽作曲家としては在世当時も、また後世からも高い評価を受けていた。実際残された宗教音楽は実に360曲にも及び、その名声はザルツブルクやオーストリア以外にも広まり、1804年にはスウェーデン王立音楽アカデミーの会員に選ばれているほどである。

その彼が残した多数の宗教作品の中で、とりわけ高い評価を受けているのが、今日演奏されるレクイエムである。これは彼が長く仕えた、芸術を愛好するパトロンであったザルツブルク大司教ジギスメント・フォン・シュラッテンバッハが1771年12月に亡くなったことを受けて作曲されたものであった。ただちょうど同じころ、彼のたった一人の娘が1歳の誕生日を迎える前に亡くなっており、この悲しい出来事も、レクイエム作曲の強い動機をなしたと考えられている。

この作品が完成した後、1772年1月に行われた演奏会にはモーツァルト親子も出席していたことが分かっており、15歳のモーツァルトも親交のあったミヒヤエルのこの作品に、深く心を動かされたと伝えられている。お聴きになればお分かりのように、後年(1791年)モーツァルトが手掛け、絶筆となった有名なレクイエムとの類似性が散見されるが、おそらく15歳の時の感動が深く心に残っていたため、そのイメージが何らかの形で反映した結果だと考えられている。

曲はレクイエムの典礼に則って、1.入祭唱とキリエ　レクイエム・エテルナム（永遠の安息を）2.続唱　ディエス・イレ(怒りの日)　3.奉獻唱　ドミネ・イエス・クリステ（主イエス・キリストよ）ホスティアス（賛美の生贄と祈りを）　4.感謝の賛歌　サンクトゥス（聖なるかな）　5.ベネディクトゥス（祝福されますように）　6.平和の賛歌と聖体拝領唱　アニュス・デイ（神の子羊）、クム・サンクティス・トゥイス（あなたの聖人たちとともに)、レクイエム（永遠の安息を）から成っている。

ミヒヤエル・ハイドン：レクイエム ハ短調 MH155 歌詞対訳

I . Introitus et Kyrie

1.Requiem aeternam dona eis,Domine:
et lux perpetua luceat eis.
Te decet hymnus Deus in Sion,
et tibi reddetur votum in Jerusalem:
exaudi orationem meam,
ad te omnis caro veniet.
Requiem aeternam dona eis,Domine:
et lux perpetua luceat eis.

Kyrie eleison.
Christe eleison.
Kyrie eleison.

II . Sequentia

2.Dies irae,dies illa
Solvat saeculum in favilla,
Teste David cum Sibylla.

Quantus tremor est futurus,
Quando iudex est venturus,
Cuncta stricte discussurus.
Tuba mirum spargens sonum,
Per sepulcra regionum,
Coget omnes ante thronum.

Mors stupebit et natura,
Cum resurget creatura,
Judicanti responsura.

Liber scriptus proferetur,
In quo totum continetur,
Unde mundus judicetur.

Judex ergo cum sedebit,
Quidquid latet apparebit:
Nil inultum remanebit.

Quid sum miser tunc dicturus?
Quem patronum rogaturus?
Cum vix justus sit securus.

Rex tremendae majestatis,
Qui salvandos salvas gratis,
Salva me, fons pietatis.

Recordare, Jesu pie,
Quod sum causa tuae viae:
Ne me perdas illa die.

Quaerens me, sedisti lassus:
Redemisti crucem passus:
Tantus labor non sit cassus.

Juste iudex ultionis,
Donum fac remissionis,
Ante diem rationis.

Ingemisco tamquam reus:
Culpa rubet vultus meus:
Supplicanti parce, Deus.

Qui Mariam absolvisti
Et latronem exaudisti,
Mihi quoque spem dedisti.

Preces meae non sunt dignae:
Sed tu bonus fac benigne,
Ne perenni cremer igne.

I . イントロイトウス・エト・キリエ

1. 主よ永遠の安息を彼らに与えたまえ
とこしへの光もて彼らを照らしたまえ
シオンにては主に聖歌を捧げ
エルサレムにては祈りを捧げまつる
われらが願いを聴きたまえ
すべての肉はみもとに参りまつる
主よ永遠の安息を彼らに与えたまえ
とこしへの光もて彼らを照らしたまえ。

主よあわれみたまえ
キリストよあわれみたまえ
主よあわれみたまえ

II . 続唱

2. 怒りの日よ、その日
地上は灰に帰する
ダヴィデと巫子の予言のように。

なんとという恐怖の来ることか
審判が至り
ものみな厳しく試される時は。
ラッパは高らかに響きわたる
すべての国の墓の上に
すべての人を玉座の前に集めだされる。

死者も生者も驚きに打たれる
すべての生物がよみがえり
審判に答える時には。

一つの本が持ち出され
そこにはすべてが書かれてあり
それに基づいてすべてが裁かれる。

ゆえに審判者が席に着く時、
隠されたものはすべて見出され
罪を免れるものはない。

あわれなるわれは、なにをか言おう。
いかなる保護者に頼むのか、
正義すらが疑われる時に。

恐るべき威力の王よ
つぐないし者を自由に救いたもう方よ
あわれみの泉よ、われを救いたまえ。

思い出したまえ、よきキリストよ
われはあなたの来臨の理由であることを
そして、その日、われを見放したもうな。

審判の席に着き、われを探したまえ
十字架の受難にてわれをあがなわれしなれば、
そのみわざを無になしたもうな。

正しき、懲罰の審判よ
われに赦免を認めたまえ。
審判の日の前に。

われは罪人のように震える
赤き印はわが額にあり
ひれ伏す者をお赦しあれ。

マグダラのマリアを赦したまい
盗人の願いを容れられたあなたは
わが上にも希望を与えられた。

わが祈りはとるに足らずとも
あなたの憐愍(れんびん)によって、われを
永遠の劫火よりお救いください。

Inter oves locum praesta,
Et ab haedis me sequestra,
Statuens in parte dextra.

Confutatis maledictis,
Flammis acribus addictis:
Voca me cum benedictis.

Oro supplex et acclinis,
Cor contritum quasi cinis:
Gere curam mei finis.

Lacrimosa dies illa,
Qua resurget ex favilla,
Judicandus homo reus:
Huic ergo parce Deus.
Pie Jesu Domine,
dona eis requiem.
Amen.

III. Offertorium

3.Domine Jesu Christe, Rex gloriae,
libera animas omnium fidelium defunctorum
de poenis inferni, et de profundo lacu:
libera eas de ore leonis,
ne absorbeat eas tartarus, ne cadant in
obscurum:
sed signifer sanctus Michael
repraesentet eas in lucem sanctam:

Quam olim Abrahae promisisti,
et semini ejus.

4.Hostias et preces tibi Domine
laudis offerimus;
tu suscipe pro animabus illis,
quarum hodie memoriam facimus:
Fac eas, Domine, de morte transire ad vitam.
Quam olim Abrahae promisisti,
et semini ejus.

IV. Sanctus

5.Sanctus, Sanctus, Sanctus
Dominus Deus Sabaoth.
Pleni sunt caeli et terra gloria tua.
Hosanna in excelsis.

V. Benedictus

6.Benedictus qui venit in nomine Domini.
Hosanna in excelsis.

VI. Agnus Dei et Communio

7.Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
Dona eis requiem.
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi:
Dona eis requiem sempiternam.
Lux aeterna lucet eis Domine:

8.Cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.

9.Requiem aeternam dona eis, Domine,
et lux perpetua luceat eis.
Cum sanctis tuis in aeternum,
quia pius es.

あなたの羊の群にわれをお加えください。
黒山羊よりわれをお分けください
あなたの右の手によって。

呪われた人々が入りまじって
灼熱の焔にさらされる時は
われを祝別された者の中にお呼びください。

われはひれ伏して祈り
心は灰のようにくだけて
最後の時の平安を願うのみ

涙のその日
灰の中からよみがえり
罪人の裁きにかけられる日
神よ彼をあわれみたまえ
主なるよきイエス
彼らに安息を与えたまえ。
アーメン。

III. 奉納唱

3. 主イエス・キリスト、栄光の王
忠実な死者の魂を、地獄の火の苦しみと
深淵の底より解き放ってください。
彼らを獅子の口より解き放してください。
深淵に落ちぬよう、暗闇に吞まれぬよう
お守りください。
聖ミカエルとその旗のもとに
彼らを聖なる光に導きたまえ

その昔アブラハムとその一族に
お約束くださったように。

4. われらが捧げまつる
この捧げ物と祈りとを
本日ここに祭ります
魂のためにお受けください
主よ彼らに永遠の生を与えたまえ
その昔アブラハムとその一族に
お約束くださったように。

IV. サンクトウス

5. 聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな
万軍の主なる神は。
天と地はあなたの栄光に満たされる。
いと高きところにホザンナ。

V. ベネディクトウス

6. 神のみ名において来る者に祝福あれ。
いと高きところにホザンナ。

VI. アニュス・デイ・エト・コンムニオ

7. 世の罪を除きたもう神の子羊よ
彼らに安息を与えたまえ
世の罪を除きたもう神の子羊よ
彼らに永遠の安息を与えたまえ
主よ永遠の光にて彼らを照らしたまえ

8. あなたの聖者たちと共に永遠に
あなたは善なのだから。

9. 主よ彼らに永遠の安息を与えたまえ
永遠の光にて彼らを照らしたまえ
あなたの聖者たちと共に永遠に
あなたは善なのだから。

指揮

石川 星太郎

【神戸市室内合奏団】 音楽監督 岡山 潔

コンサートマスター	白井 圭					
第1ヴァイオリン	萩原 合歓	幸田 さと子	黒江 郁子	中山 裕子	田中 李々	
第2ヴァイオリン	西尾 恵子	井上 隆平	谷口 朋子	前川 友紀	奥野 敬子	三輪 莉子
ヴィオラ	亀井 宏子	中島 悦子	横井 和美			
チェロ	伝田 正則	田中 次郎	山本 彩子	池村 佳子		
コントラバス	長谷川 順子	林 俊武				
フルート	森岡 有裕子					
オーボエ	小林 裕	中根 庸介				
ファゴット	石川 晃	小林 道子				
ホルン	日高 剛	蒲生 絢子				
クラリーノ	神代 修	篠崎 孝				
トランペット	秋月 孝之	横田 健徳				
トロンボーン	加藤 直明	中村 友子	菅原 薫			
ティンパニ	安江 佐和子					
オルガン	荒井 牧子					

【神戸市混声合唱団】 音楽監督 中田 幸子

ソプラノ	植田 祐佳 ●	老田 裕子	笠置 雅子	金岡 伶奈	周防 彩子	
	高山 景子	津田 佳子	内藤 里美	端山 梨奈	丸山 晃子	
アルト	栗木 充代	高原 いつか	友好 博子	西本 鑑子 ●	野上 貴子	
	肥田 真莉子	福原 寿美枝	村井 優美	八木 寿子	山田 愛子	
テノール	秋本 靖仁	井澤 章典	古橋 由毅	清水 俊徳	谷口 文敏	
	土井 淳平	馬場 清孝 ●	眞木 喜規	三木 秀信	山本 欽也	
バス	◎石原 祐介	五島 真澄	嶋本 晃	高橋 純	中野 嘉章	
	西尾 岳史 ●	福嶋 勲	藤村 匡人	森 孝裕		
ピアノ	大原 亜樹子	河内 仁志 ●	沢田 真智子	多久 江里子	宮下 恵美	
副指揮者	太田 務	青木 耕平				
マネージャー	皆本 美千代					

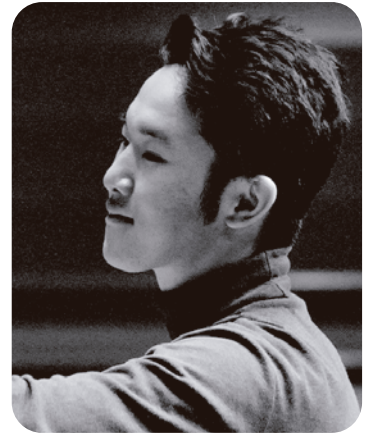
(◎コンサートマスター・●パートリーダー)

<プロフィール>

石川 星太郎

Seitaro Ishikawa

1985年東京生まれ。ドイツ・フライブルク国際ピアノアカデミーに2年にわたり参加。東京藝術大学指揮科で田中良和、ハンス=マルティン・シュナイトに師事。同大学を首席で卒業。アカンサス音楽賞受賞。2006年武生国際音楽祭にて、ジャパンアカデミーフィルハーモニックを指揮し、ヴィオラの今井信子らと共演。以降、同音楽祭のレギュラーメンバーとなる。また、今は亡き巨匠ゲルハルト・ボッセの薫陶を得、アシスタントとしての任も担った。現在はロベルト・シューマン大学デュッセルドルフ・指揮科でリュディガー・ボーンに師事。ジャパン・アカデミー・フィルハーモニック常任指揮者。2013年3月、神戸市室内合奏団の定期演奏会(神戸と東京公演)で、格調高いモーツァルトとシューベルトを披露し、成功を収めた。



神戸市室内合奏団

Kobe City Chamber Orchestra

1981年、神戸市により設立。バロックから近現代までの幅広いレパートリーのほか、埋もれた興味深い作品にも意欲的に取り組み質の高いアンサンブル活動を展開している。

1998年、巨匠ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてから、演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、充実した内容の魅力あふれる選曲や説得力ある演奏で各方面からの注目を集めている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのJ.S.バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演はCDとしてリリースされている。また2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。

2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、更なる音楽的發展を目指して、新たな活動を開始した。



神戸市混声合唱団

Kobe City Philharmonic Chorus

1989年に神戸市により設立された日本を代表する合唱団の一つ。ウラディーミル・アシュケナーズ指揮のNHK交響楽団、ゲルハルト・ボッセ指揮の神戸市室内合奏団との共演を始め、多彩な演奏活動を展開。2010年には、合唱の国ラトヴィア(リガ市)で世界的に有名な室内合唱団「アヴェ・ソル」と姉妹合唱団協定を締結。2013年7月、リガ市からの招聘により、ユネスコ無形文化遺産であるラトヴィア「歌と踊りの祭典」に出演。

2011年に初のCD、特別演奏会「宇野功芳 叙情の世界」を、2012年には第2弾CD「宇野功芳 叙情の世界2」をリリースし、レコード芸術特選盤などに選出される。澄み切った密度の高い合唱は、美しい神戸ハーモニーとして高い評価を得ている。